

## 「情報として読む」と「古典として読む」

教授 山下 憲 昭  
(社会福祉学)

「若いころ、血を売ってでも本がほしかった」との思い出を語ってくださったのは、社会福祉研究の大先輩だった。20歳ほど上の先輩は、1950年代に大学生生活を送っておられた。いまでは想像しにくいことだが、1960年前後の日本には、血を売ることその日の糧を得る人たちがいた。先輩は、社会福祉研究の第二世代というべき時代を担われた方であった。戦前からの社会政策研究の発展を経て、社会福祉研究が領域的にも学術的にも独自性を主張しはじめたころの世代である。当時の世相は、高度経済成長期に入ったとはいえ、敗戦後の窮乏状況を引きずっていた。社会保障制度も整っておらず、貧困問題対策が社会福祉の主たるテーマであって、社会運動・労働組合運動の目標も「生存権保障」であった。

先輩が欲した書籍は、『資本論』ではなかったはずだが、大河内一男先生の『社会政策総論』だったのか、大河内と社会政策本質論争を繰り広げていた岸本英太郎先生の『日本労働運動史』や『窮乏化法則と社会政策』だったのか。何度もくりかえし読んだとのことであった。売血という社会現象と、そしてまで本をほしいと思ったという先輩の話の印象が強烈で、何の本の話だったのかは、残念



なことにはっきり覚えていない。

この小論のタイトルに表わしたのは、内田義彦著『読書と社会科学』（岩波新書、1985年）のはじめのほうに記されている言葉である。私が大学院を退学したころの出版で、その前に出版されていた『社会認識の歩み』（岩波新書、1971年）とともに、気軽に手に取れる新書版であるにもかかわらず、当時の私には難解であった。

内田氏は、古典として読むことの意義をつぎのように述べている。「新しい情報を得るという意味では役立たないかもしれないが、情報を見る眼の構造を変え、情報の受けとり方、何がそもそも有益な情報か、有益なるものの考え方、求め方を — 生き方をも含めて — 変える。変えるといつて悪ければ新しくする。新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかにな新鮮な風景として身を囲み、せまってくる、というよ

うな『読み』があるわけです。」

非才の私には、ここに示された内容を学生たちに伝えるべき言葉として「翻訳」することはとても難しい。情報はいくらでも手に入る。本を読まなくても情報は大量に降ってくる。情報の嵐のなかで、自分を閉ざしたくなるかもしれない。加速する「情報化社会」から「AI化社会」へのながれのなかで、効率性や利便性に最大の価値があると思いつまみしている、あるいは思いこまされている側面があるとすれば、先輩の欲求や内田氏の論説を手がかりにして、いまいちど、自分のものの見方の構造を振りかえり、いま目に映っている情報の受けとり方、大きく言えば、生き方を見直すことができるのではないか。時代と社会の変化についていけない高齢世代の苛立ちが言わせているのではないかと自戒しつつも、古典に学ぶことの意義を学生たちに伝えたいと願っている。

20世紀の社会発展の特徴は生産性の向上と情報化で表される。つぎにくるAI化社会のなかで、人間の存在そのものを変えてしまう可能性があるともいわれる「シンギュラリティ」(技術的特異点)は2045年ころには訪れるとのことである。このような社会の発展段階で、富と情報の蓄積はますます不均等になっている。わずか半世紀前に目の前の貧困をどうしていくのか、工業生産の増大に身を削っていたわれわれが、新たな事態に向き合うことを迫られている。守旧的感觉ではなく、時代と社会の変化を受け止め、新たな価値を創造していくための、人間を中心にした社会のあり方を追求していく足場をしっかりと固

めていかねばならないと思う。真宗学、仏教学、哲学、文学、歴史学など、とくに人の内面の営みの研究に足場をおく大谷大学の学びは、このような時代だからこそ、大事にしていかなければならないと思うのである。

はじめに記した先輩の話題にはつづきがある。この先輩は、社会福祉行政の第一線で指導的な役割をはたされたあと、大学に転じられた。そのころの会話のなかで、「俺、いまだに本に線を引けない」「大事なところはコピーしてそれに書き込みしている」と。貧しい時代の記憶にしばられているとも思えるが、あの時代、理論を学ぶこと、理論を読み深めていくことは、どのような手段で書籍を蒐集するのも含めて、とても価値あることであつたと思う。いま、私は、自分の中心点に迫ってくるような読みができていないのか。情報の並べ替えだけで汲々としているのではないか。